

巨大地震のその日、それから3日間、原発大震災に思う

東海第二原発も決して安泰ではなかった

相沢 一正

その日、11日は東海村3月定例議会的一般質問最終日だった。昼前までには終わり、私は午後を無党派の控室で資料の整理にあてていた。揺れが始まったときいつもとは違うという感じを受け、咄嗟に椅子から立ち上がり机の下に潜り込んだ。その後背後の書棚が倒れてきた。狭い空間でごんだままの一時が長く感じられた。

大きな揺れが収まった後、早く屋外にでなければと思い、体を動かしたが椅子と書棚と書籍で這い出る隙間はなく、内からはそれらを押しつけることもできなかった。「誰かいないか」と叫ぶしかない。幸い廊下に出ていた同僚議員や職員の耳に届き、かすり傷一つ無く助け出された。部屋の時計は午後2時46分7分まで止まっていた。東海第二原発は大丈夫だろうか？と呟いたが誰も無言だった。

しになった。1階の水道課では天井が落ち職員がケガをしたとの話を聞く。2階から本庁舎に繋がる通路や委員会の天井が落ちていた。

外へ出てみると本庁舎1階玄関ピロティ天井が崩れ落ち車が1台潰れていた。議会棟の周辺が10センチメートルほど沈み亀裂が走っていた。本庁舎の周囲もそのようだった。余震が続くなか家に帰る。道々、瓦屋根のずしが崩れ大谷石塀が崩落している家々が続く。我が家は外か



らが目視で異常はなさそうだからに入る。1階の仕事部屋は作りつけの本棚から書籍、ファイル、テープが飛び出しヤマをなし崩れていた。2階の書庫も同じく書籍が床面にヤマになった。2階の植木鉢が落下し1階に散乱し、納戸に格納していた人形ケースが落ちてガラスが割れていた。

それからの3日間は停電と断水、電話も使えず、テレビも見られなかった。夜は蝋燭の明かりでラジオを聞いたが、聞き漏らしたのか東海第二原発に関する情報はない。福島第一原発の水素爆発が報じられて以降も新聞にも載っていない。昼間も特別の人の動きはないのだから、異常は無かったのだろうか？と考える。

後でわかったことだがこの三日間、一般に情報の途絶していた東海第二原発も決して安泰ではなかった。11日19時22分に津波を被った非常用ディーゼル発電機が1台停止し、それに繋がる残留熱除去系ポンプが停止し、崩壊熱を除去するために二系統で行われていた原子炉の冷却が一系統のみとなってしまった。そのため炉内圧力は上がり減温・減圧が必要になり、主蒸気逃し弁を開閉し原子炉の減圧操作をしていたのだ。

原子炉隔離時系のポンプと高圧炉心スプレーポンプがサプレッションプールの水を原子炉に注水できてはいたが、プールの水温は上がり通常の2・3倍近くにもなった。水位も通常の911mmから下がり、600mm〜1500mmの間を変動する。こうした不安定な状態を脱するのは14日10時2分、やっと

外部電源が回復したからである。この間、62時間40分、私たちは何も知らずに過ごしていたのだ。しかも使用済み燃料プールの冷却系ポンプも停止していた。

改めて恐ろしさを感じる。もう少し津波の高さがあつたら、あるいは何かの不具合ですべての非常用ディーゼル発電機が停止したら福島第一原発の二の舞になったかもしれないと思うからである。そうならなかったのはほんの偶然ではなかったか。福島第一原発の次々と悪化する状況を見、東海第二原発の今見た時間帯のおおよそを知ったとき、「原発はもう終わりだ」との思いを新たにした。



1942年日立市生まれ。現在、東海村議会議員。臨界事故被害者の裁判を支援する会事務局長。福島県立平工業高校教諭を経て、地元で脱原発運動に取り組む。1973年、東海第二原発設置差し止め訴訟原告団代表。1997年、動燃爆発火災事故発生を機に脱原発とうかい塾を結成。